

間身体性のモデル

砂子岳彦

A Model for Intercorporeality

Takehiko SUNAKO

要旨

間身体性は<自者・物・他者>の双対的3項関係としてとらえられる。双対的3項関係は自他の向かい合いに基づいた立方体とすることができる。このことから、間身体性の自然化によって立方体モデルが導かれる。

キーワード：間身体性、自然化、認知科学、現象学

Abstract

Intercorporeality can be seen as a dual triad-relationship <Self-Thing-Other>. The dual triad-relationship shapes a cube based on self and other in opposition to each other. The shape gives a cube model through naturalization of intercorporeality.

Keywords: intercorporeality, naturalization, cognitive science, phenomenology

1. はじめに

現象学の自然化によってあらたな知見が認知科学にもたらされた。両学はともに共通するテーマをもっている。そのテーマとは認識であり、意識である。意識といっても、現象学では身体性にその領野をひろげていて、その意味でも認知科学が身体との相関を前提にした心のモデル化を指向しているという点で呼応している。しかし、現象学と認知科学は異なる方法論をもっている。前者の超越論的還元に対して、後者は客観的視点からの自然化という方法をとる。これは一人称的に直に観察をするか三人称的に俯瞰するかを意味する。したがって、現象学の自然化には拮抗する手法がせめぎ合う。

現象学の自然化とはそのシステム志向であるといっている。互いに異なるアプローチをもつ現象学と認知科学からもたらされる概念がシステムである。ルーマンは「意識のオートポイエシス」によって、両学の拮抗するアプローチを乗り越えようとした（1991, p231）。自己参照という機能をシステムに付与することによって意識の自律性が与えられる。システムの持つ構造は、かたやモデルという客体的側面をもち、かたや動的自律性というその機能的側面をもつ。モデルはシステムのいわば枠組みである。モデル化されることによって、現象学、心理学、そして認知科学など、諸学の相互の乗り入れが可能になるばかりでなく、諸学の意味とスタンスが明瞭になる。しかし、システムが認知科学と現象学を媒介する概念であることにより、同時に両者の互いに避けがたい葛藤がつかまとう。両学のあいだの葛藤があるほど新たな領野を開く可能性がある。

この報告の目的は自然化をメルロ＝ポンティの間身体性に適用することである。メルロ＝ポンティはその間身体的な構造的な理解を示しているために、一人称的側面からはやや滲み出ている気配があり、他の現象学に比べてモデル化が実行しやすい。そのために、第2節では、自他の向かい合いにおける間身体性と物理的（客体的）空間性を明らかにし、第3節では間身体性のモデルが与えられる。自然化の当面のゴールがシステムによる記述だとすると、ここではその前段階であるモデルを示している。

2. 自他の向かい合い

自他の向かい合いを二つの側面から考える。一つは始原的な自他である間身体性であり、二つ目は客体として空間に埋め込まれた自他である。自他の向かい合いに対するこれら二つの視点を摺り合わせて、現象学的間身体性の自然化を構想する。

2.1 始原的向かい合い

間身体性から双対的な3項関係を導く。その3項関係とは〈自者－他者－物〉であり、くわえて自他による双対性をもつ。

対象の認識は始原的に向かい合う自他のあいだでなされている。逆に言えば、自他のあいだという始原的な空間が対象を意識に浮かび上がらせる舞台である。自者、他者、そして物（者）という三者がそのおかれている場所とは、自者にとっては目の前にある奥行きである。物を見るということは、かならずこの奥行きのなか、すなわち自他のあいだで見られている。たとえ他者を視界のうちに見なくとも、自他の向かい合いのもとで観察がなされているという意味で始原的なのである。

ここに、自他のあいだとは間身体性のことである。メルロ＝ポンティ（1974, pp264-274）は、自己に先駆ける生である「無名の実存」（超越論的主観性）を間身体性のうちに見出している。始原的な自他の向かい合いがもろもろの認識にさきがけて設定されていて、メルロ＝ポンティはこれを生まれいつる状態における〈自者－他者－事物〉の系としている¹⁾。すなわち世界は自他の共同・出生（co-naissance）の上で生起している。

間身体性を自他それぞれに引き戻してみるならば双対的である。自者は、他者の他者として自らを想像することができる。このことは他者側でも同様の想像が可能であろうと考えることができる。他者の他者は、自者にとっては自我であり、他者にとってのそれを自者にとっての他我と呼ぼう。このことが、〈自者－他者－物〉の認識が自者側でおきていることなのか他者側でおきていることなのかということによって双対的になる（簡単のため「事物」を限定して「物」とした）。〈自者にとっての自者－自者にとっての他者－自者にとっての物〉と〈他者にとっての自者－他者にとっての他者－他者にとっての物〉である。「自者にとっての自者」を自己とよび、「他者にとっての自者」は他己と呼ぶならば、上記の双対性は〈自己－他我－自者にとっての物〉と〈他己－自我－他者にとっての物〉となる。しかし、「自者にとっての」物あるいは「他者にとっての」物とは何を意味するのだろうか。自他の認識する物とは異なっていて、たとえば自者がリングだと思っていたものが実は他者はリングの模型だと知っているとしたら、「自者にとっての物」と「他者にとっての物」が異なるだろう。自者または他者の物に対する思いこみは、ここで意図している〈自者－他者－物〉の「物」の共通認識ではなく、物に対する各自の理解である。〈自者－他者－物〉における物とは、自他が共通して認識する対象である。たとえリングと模型という誤解があったとしても、自他の間ですでにそこにあるりんごのような物についての認識は共通している。し

たがって物の自他による双対性、というよりはむしろ、自他に共通した次元での（自己と他己をあわせた）己あるいは（自我と他我をあわせた）我という2通りの自他の同一性からの双対性をもっている。少なくとも定義上は己（自己と他己）も我（自我と他我）もそれぞれ主体と客体の領野で自他を共有しているからである。己と私の差異とは、非人称的であるか人称的であるかの違いといってもいい。我が人称的であるのは、他者の他者、すなわち「あなた」の「あなた」である「わたし」だからである。したがって、＜自者－他者＞においては自/他による双対性があり、＜物＞については己/我による双対性があるといえる。＜物＞の双対性とは己（自己・他己）にとっての物と、我（自我・他我）にとっての物とのあいだにある。前者は物として一致を見るも、後者はしばしば認識を同一にしながらその価値にズレをもつのも自我観が付着するためである。カントが対立概念とした物自体（Ding an sich）と我々にとっての物（Ding fur uns）という区別に等しい。以上のように、3項関係＜自者－他者－物＞は双対的である。このことは、3項関係＜自者－他者－物＞を、己我によって＜自己－他己－己にとっての物＞と＜自我－他我－我にとっての物＞という対に分けるとより明瞭である。これは、自他よりも己我による双対性を表している。ただし、己我も自他から派生したと考えるならば、自他による双対性と言ってもよいだろう（表1）。

表1 双対的3項関係

	自者	他者	物(者)
己	自己	他己	己にとっての物
我	自我	他我	我にとっての物

自他が双対的であるとはその向かい合いのうちにある鏡面対称性をもたらす。鏡との向かい合いと他者との向かい合いと共通する驚きをもたらす。つまり、メルロ＝ポンティが「鏡というものは、物を光景に変え光景を物に変える、そしてまたわたしを他者に変え他者をわたしに変える、万能の魔法の道具なのだ」(2001, p157)と述べているように、見られる者が見る者になり、見る者が見られる者になるという、志向的侵犯が行われる。自他の始原的向かい合いは知覚をささえ、また知覚によって支えられている。

鏡面対称性によって、前後、左右、上下の三つの方向性の特性が見えてくる。まず、鏡面対称において、前後と左右は逆転しているように感じるが、上下は共通している（同一性）。上下と左右は見えているのだが、前後の奥行き（視線）は自者には見えてはいない。そして、鏡に映る自分にとっての左右のみが（映っている人の前

方もその身体の前方となっているが差異として）入れ替わっている。以上のように、前後、左右、上下は、それぞれ視線、差異、同一性という特性として鏡によって浮き彫りにされる。視線、差異、同一性は、間身体的（始原的）空間の持つ意味であり、それらは観察者にとっての生きられた空間の方向性である。

2.2 客体的向かい合い

客体的な自他の向かい合いは始原的（実存的）自他の向かい合いと対応している。現象学的には、客体的な自他の向かい合いを還元することによって、始原的な向かい合いにおける間身体性が導かれる。逆に、始原的自他の向かい合い、すなわち間身体性は、物理的空間に引き渡されると、客体的身体同士の向かい合いとなる。

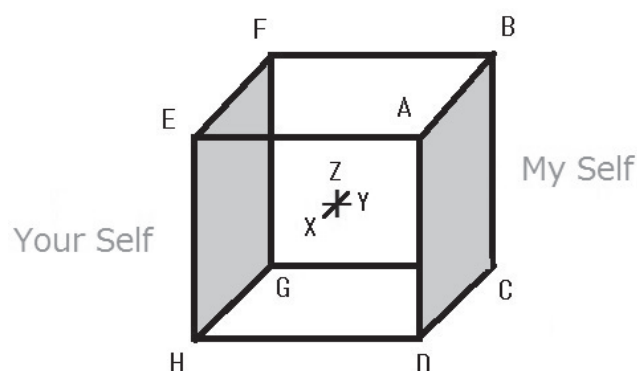


図1 立方体構造

3次元空間に埋め込まれている自他の向かい合いを六面体によってカットすることができる。向かい合う自他の前頭面（図1では視座を含む垂直に立つ面ABCDと面EFGH）は平行に3次元空間に埋め込まれている。その自他の前頭面とそれに直交する側面および上下の面で取り囲むことによって、正六面体を切り出すことができる。自他のあいだ、立方体の中心に、物が置かれているとしよう（図1）。六面の向かい合う面（対面）の中心点を3直線で結び、それらをデカルト直交座標と同一視して、Y軸は向かい合う自他の視座を結ぶ奥行き方向とする。また、Y軸は図1における面ABCDと面EFGHを貫通する自他の交叉する視線でもある。Z軸は自他にとって上下の軸であり、X軸は左右の軸である。すなわち、立方体の中心点に置かれている物の中心を原点とする3次元空間の座標軸X,Y,Zをそれぞれ左右、前後、上下の直線と同一視する。

立方体の六面は、互いに向かい合う面を対にすると3対の面で構成されるという意味で双対的な3面（による3項関係）をなしている。3対の面はそれぞれX,Y,Zの3軸によって結ばれる左右、前後、そして上下の対面で

ある。このように、立方体は3次元空間座標軸に平行な辺によって再現する立体であるため、3次元空間に埋め込まれた客体的自他は、この立方体によってその空間的配置を（無限に広がる空間よりも）明瞭に示すことができる。

以上、自他の向かい合いを現象学的側面と物理的側面の両面から考察してきたが、これらを立方体モデルによってその対応を見ることができる。しかしながら、自然化によって、向かい合う自他の3次元空間から切りだされた立方体は、客体的世界の前に生きられている世界に立ち戻るとい現象学的姿勢に反していることは明らかである。自然化は世界の存在を素朴に受け入れる態度からもたらされる記述作業であり、それゆえ認識し得る客体的世界をすでに前提としてしまっている。

3. 間身体性の自然化

始原的自他の向かい合いも客体的向かい合いも、双対的3項関係をもっている。しかし、この双対的3項関係は、それぞれ異なる意味をもっている。次元の異なる自他の向かい合いにおける構造（双対的3項関係）が蝶番となることで、立方体から自他の向かい合いのモデルが導かれる。ここに、モデルとは意味の与えられたカタチ（シェーマ）のことである。

3.1 立方体モデル

六面体の内部も含めた客体的立方体の面や軸に意味を与えることによって間身体的立方体モデルを構築する。始原的空間と客体的空間の対応を利用して、客体的空間に始原的空間の意味付けをすることによって、間身体性のモデルを考えよう。始原的空間には現象学的意味があるが、客体的空間には等質的なユークリッド空間としての意味以外には意味を持たない。自他の向かい合いにおいて、モデルが始原的な向かい合いと物理的なそれへとを媒介する。この媒介が始原的な向かい合いと客体的な向かい合いを対応させている。それは向かい合う2面から、六面体への拡張を意味する²⁾。

客体的立方体に与える意味とは始原的な向かい合いにおける意味であり、知覚的意味、表象的意味そして客体的立方体自身も持っている客体的意味がある。始原的向かい合いにおける知覚的意味とは、見えあるいは想像的な見えであり、表象的意味とは表現あるいは表象にある。立方体モデルの内部は物理（客体）的空間に対応する。したがって、立方体の内部は客体的空間が対応し、外部つまり六面とその方向性には始原的空間が対応する。まず六面に知覚的意味を与える。立方体の六面の各中心には視座を置いて、そこからの向かい合いの見えを視座

を含む面に映し出すことができる。たとえば、自者の前頭面には他者の正面の映像が映っている。また、天板には向かい合う自他の頭部が映し出される。このように六面から観察される3項関係〈自者－他者－物〉を知覚的意味とする。

つぎに六面に対して表象的意味を重ねる。客観的な空間においては三軸は等質的であるためにその座標の取り方に依存しないが、観察者（自我）がその空間（Y軸上）にいる場合、上下、左右、前後の方向は意味をもっているもはや入れ替え不可能となる。X,Y,Z軸は観察者にとっての始原的意味は、それぞれ差異、視線、同一性であった。すなわち、奥行きY軸は視線方向と重なって、知覚の方向性を与えている。そして（X軸上に立つ）観察者（自我）には、「光景を見ているのは私だ」というとき、知覚正面（XZ平面）が与えられる。左右に広がるX軸は対面する他者との差異を意味し、X軸上に立つ観察者は自他とそのあいだにある物を見るだろう、とY軸上の観察者（自我）は想像できる。X軸上に立つ観察者の位置からは、自他の横顔が見えるという意味では自他の対立的差異を観察する。間身体的視座を与えるこの位置を自己の位置としよう。上下のZ軸は同一性を意味し、Z軸上に立って上空から自他の向かい合いを観測すると自他の俯瞰が得られる。上空から自他の区別が困難な頭部のみが見え、自他の営みを統合的にみることができる。「高所に立って」と言うとき、しばしば自他の対立的差異を越える視点が促されている。

以上のように、自他の向かい合いから抽出された構造である双対的3項関係が立方体のうえで意味が重ね書きされた。前後の対面は互いに相手のみが観察される視座、左右の対面は向かい合いを3項関係として客観的に観察できる視座、そして上下の対面は自他の違いを統合できる視座を含む。それぞれ、主体として与えられる知覚正面、客体として与えられる自他の身体、そして主体と客体を統合的視座を意味していると考えられる。すなわち、前後の視線が知覚正面を与え、左右の差異が自他の違い（あいだ）を与え、上下の同一性が俯瞰を与えている。このように方向性（座標軸）そのものが意味を与えるために、座標軸と意味と六面が連関していることが伺われる³⁾。立方体モデルは、結局のところ、双対的3項関係を意味づけされたシェーマである立方体であらわされている。

2.2 シェーマL

ラカンのシェーマLにおいても、自他の向かい合いが実現している。ラカンのシェーマLを上記の自他の向かい合いに対応させることによって、別の角度からも意味が与えられる。ラカンは、自我と主体を分けたうえで、主体は無意識的な機能のことであり、「あらゆるナルシ

シズムの関係において、自我は他者であり、他者は自我である」と述べている(1988)。つまり主体にとって自我は主体からずれている他者であり、その他者のように想像されているのが自我である。シェーマLにおいてA,S,a,a'は、汎用的な使用がなされているが、ここではそれぞれ他者、主体、自我、他者の自我と考えよう⁴⁾。混乱を避けるために、自者にとっての主体と自我をそれぞれ自己と自我、他者にとっての主体と自我を他己と他我を対応させると、ここでの議論のにつながる。

したがって、ラカンのシェーマLを立方体の自己、他己、自我、他我の関係に対応させることができる。ラカンによれば自己・他己は象徴界にあり、自我・他我は想像界にある。しかるに、自我は言葉によって得られるということを考慮すると、ここで象徴界・想像界をそのままこのモデルの図式に適用すると、自我—他我は想像的であり、自己—他己は象徴的な位置関係である。さらに、物自体が現実界にあるとすると立方体モデルにおける関係が利用できる。己(自己—他己)、我(自我—他我)、物(己にとっての物—我にとっての物)をそれぞれ象徴界、想像界、現実界におくと、X,Y,Z軸に対応する。自我からは向かい合う相手の姿(他我)が見え、自己からは自他の向かい合いが見え、己にとっての物からは三体の様子が俯瞰できる。

物に関する2面が加わっているのが立方体モデルであるから、このモデルはシェーマLを拡張したものであるといえる。自他の関係において、物との関わりを立方体モデルは示唆している。たとえば箱庭療法が物によってカウンセリング効果をもたらしているのも、カウンセリングの場で始原的關係性を取り戻すうえで、自他の関係に加えて物が間身体性に含まれていることから、物が利用できるということは理解できる。

2.3 立方体モデルの幾何学

間身体性の自然化をさらに遂行しよう。自然化はより物理的な空間への射映を要請する。それはモデルを幾何学的な表現に展開することを意味する。

ファイバーバンドルは、空間の各位置が決まるとそこに貼り付けられるさらなる空間を指定することによって組み立てられる拡張空間である。貼り付けられる空間はファイバーと呼ばれ(Fとする)、物理的空間をMとすると、(M,F)としてあらわされる。Fを除外するといつでも射影 $\pi : (M,F) \rightarrow M$ によって物理空間に落ち着く。

物理的空間の各点に始原的空間を貼り付けることによって、物理的空間と間身体性の接合を試みてみよう。メルロ＝ポンティは1960年に「私の身体は世界と同じ肉でできている」(1981, p68)と書いているように、間

身体性は肉の存在論へと発展した。間身体性は物理的空間というよりは、超越である。その超越を別次元における展開として考えるならば、その空間のどの位置に立っても間身体的認識(つまりは六面体)がその空間に貼り付けられるという意味ではファイバーバンドル構造を持っている⁵⁾。

すなわち、ファイバーバンドルによって、間身体性の立方体モデルを物理的な空間に展開することができる。立方体の内部は3次元空間Mであり、立方体の表面はそれぞれことなる次元の平面であることに注意する。立方体には、内部の空間に六面あるいはその部分空間Fが張り付いているのであるが、物理的な空間に展開する際には、内部の空間の各点に面Fが貼り付いていると考える。これはファイバーバンドル $\pi : (M,F) \rightarrow M$ によって客体的(物理的)空間Mに射影されることを示している。このことによってモデルから幾何学的空間へとさらに自然化がなされる。

4. おわりに

間身体的意味を与えられた立方体モデルに時間性が組み込まれるならば生命システムと呼べるものになるだろう。野家(2003)によると生命システムは、物理的システム、論理的システム、そして心的システムから構成される。それぞれのシステムにこれまでの呼称を対応させると、身体、自我、そして自己と呼べる。ここでいう自我は世界内において道具関連の中心であり、意義の要となる存在者である。また、自己は個別化された非人称的機能といていい。生命システムとしての間身体性は身体、自我、そして自己から構成される生命的ダイナミクスであるという意味から、時間性が、意識の自然化において、持つ意味は大きいだろう⁶⁾。

自然化によって、現象学のいっそうの認知科学や心理学への接近がなされるとともに、自然化ゆえの斥力も想定できる。メルロ＝ポンティによれば「われわれを世界に結びつけている志向的な糸を出現させるためにこそそれを緩める」という。野家(2003)が志向性の再考を迫るのは、対象への方向付けという主体を認める暗黙の前提がみえてくるからであろう。現象学と認知科学のはざままで翻訳される概念のずれがシステムを通して浮き彫りにされることによって、逆説的であるが新たな進展が期待できる。認知科学の一部で成果をあげているように、現象学が一旦決別した自然化は、適切なモデルあるいはシェーマによって息を吹き返すだろう。しかし、生命あるいは意識といったものが何を意味しているかという問いがなければその手がかりは得られないように思われる。本稿で示した立方体モデルは、システム化の前段階

にとどまるが、間身体性の構造を自然化した提案であるということではできらう。

注

- 1) 船木亨によれば、始原的な自他の向かい合いによって、見ることを支えている奥行きがもたらされると言う (2001, p155)。
- 2) サルトルがいうように、「他者のまなざしはわたしに空間をさずける」(2001, p150)。この場合の他者とは、いま自者がいるところからではないところからの観察者である。
- 3) フランス語で意味は sens であり、方向という意味もある。始原的自他の向かい合いにおいてはこのことの意味は重要である。
- 4) A は大文字の他者、a は小文字の他者と呼ばれる。a は対象化された自己という他者であるともいえる (1988, pp69-73)。
- 5) 空間の各点に立方体モデルに組み込まれた間身体的意味の場を貼り付けることによって、空間の拡張となっている。実際このことによって認識の場が形式的に定義できるだろう。ファイバーバンドルは空間の一点を固定してはじめてファイバーが意味を持つ空間である。このことと還元が無関係ではない。空間上の位置の固定とは物理的空間の還元を意味し、その位置でのファイバー、すなわち間身体的場に着目できる条件である。
- 6) ハイデガーによれば存在が時間性、あるいは現存在によって規定される。そのことが、間身体性の力学的システムに反映するならば、間身体性における存在の運動こそが時間性を与えているはずである。つまり、存在の力学的システムにおいて時間性が反映しているとは、立方体モデルにおける運動のパラメータが時間であることである。生命(システム)にとって時間が本質的であるのはこのためである。

参考文献

- マトゥラーナ、ヴァレラ、河本英夫訳、『オートポイエーシス』、国文社、1991年。
- モーリス・メルロ＝ポンティ、竹内芳郎、木田元、宮本忠雄(翻訳)、『知覚の現象学』、みすず書房、1974年。
- 大西宗夫、『ラカンのシェーマLについて』、高知大学学術研究報告、第37巻、pp69-73、1988年。
- 船木亨、「メルロ＝ポンティにおける意味(サンス)」、『熊本大学文学部論叢』、第22号、1987年。
- 船木亨、『メルロ＝ポンティ入門』、筑摩書房、2000年。
- 船木亨、『<見ること>の哲学』、世界思想社、2001年
- メルロ＝ポンティ、メルロ＝ポンティ現象学研究会、『メ

- ルロ＝ポンティの研究ノート』(『近代哲学寸評』、『野生の存在』を含む)、御茶の水書房、1981年。
- 鷺田清一、『メルロ＝ポンティ』講談社、2003年。
- 野家伸也、「生命システムとしての意識——現象学とシステム論の統合に向けて——」2003年(関西大学文学部哲学倫理学専修サイト
- http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~t980020/Husserl/vol.1_2003/noe2-j.pdf)
- C. ナッシュ、S. セン、佐々木隆監訳、『物理学者のためのトポロジーと幾何学』、マグロウヒル、1989年